職場ルポ

●特集● 企業内の支援者

「一緒に働く」を基本に

―カイハラ産業株式会社 ―

（文）清原れい子　（写真）小山博孝

積極的に仕事を進める岩川香織さん

カイハラ産業株式会社本社・本社工場

取材先データ

カイハラ産業株式会社
〒729-3107　広島県福山市新市町常1450
http://www.kaihara-denim.com/
TEL 0847-57-8111　FAX 0847-57-8811

keyword: 聴覚障害、身体障害、製造業、トライアル雇用、企業内ジョブサポートリーダー

POINT

① トライアル雇用制度を活用
② ジョブサポートリーダーが定着支援
③ コミュニケーションを確実に

横山雅之総務部次長

世界に誇るデニム生地を生産

広島県東の福山市街から中国山地へ。かつては備後絣（びんごかすり）の生産が盛んだったという一帯には小規模な縫製工場がいくつもある。こんな場所にまさか本社が?と思いつつ、車を走らせていくと、山に囲まれた田んぼの中に、「カイハラ産業株式会社」本社と本社工場のクリーム色の建物群が現れた。

工場の外壁に「桃李不言下自成蹊」の大文字が目立つ。その意味は「桃やスモモは何もいわないが、その花や実にひかれて多くの人が集まってくるので、木の下には自然に小道ができる」。つまり、優れた商品を作っていれば、不便な山奥の会社にも人が買いにきてくれる！

「カイハラ」の社名はなじみが薄いかもしれないが、ユニクロ、エドウイン、リーバイス、ビッグジョンなどのほか、世界の超高級ブランドやニューヨークのジーンズ専門メーカーにも高品質のデニム生地を提供している、国内シェア50％近い素材メーカーなのだ。創業者の貝原助治郎氏は1893（明治26）年、故郷で藍染の備後絣を作り始めた。1951（昭和26）年、株式会社となり、現社長は六代目にあたる。

布団地、着物、モンペ……と生産品を変化させながら発展してきたが、中東へ輸出していた民族衣装の生地の売れ行きが政情不安やポンド切り下げで一気に落ちた1967年、ブームの兆しが見えていたジーンズのデニム生地の生産に転換を図った。そのいきさつから、総務部次長の横山雅之さんにうかがった。

「当時、この地域ではジーンズの縫製が始まっていて、米国からの輸入生地を使っていました。長年の藍染めの技術を生かして日本製のデニムを作れないかといわれ、絣を染める機械ではデニムは染まらないので、アメリカで行われていたロープ染色を研究して、1970年、国内で初めて、糸をロープのように束ねた状態で染めるロープ染色機（藍染連続染色機）を開発しました」

欧米では作業着だったジーンズは、日本にはファッションとして入ってきた。

「ジーンズの王様といわれるリーバイスが買ってくれるものを目標に、高品質なものを作ることを目指しました。今日では国内の繊維業は少なくなり、付加価値のつきにくい綿素材を扱っているのはうちぐらいですが、国内で製造を続けていきたいという思いがあります」

技術開発にたゆまぬ努力を続け、世界に誇るデニム生地メーカーに。いまも糸・染め方・織り方を変えるなどさまざまな組合せで、年間800種類以上のデニム生地を開発している。

「常に新しい商品を開発し続けていくのが大変です。海外では作れない難しい商品、手のかかる商品の注文をいただき、そのなかでも少しでも安くと、知恵を絞っています。開発したもので市場に出るのは3割くらい。会長は『一番失敗の多い会社』といいますが、それが国内で生き続けられている理由だと思います」

会社の制服は、もちろん「カイハラデニム」。みなさん、見事に着こなしている。

「自社製品に愛着を持つとの思いで、自分たちの作ったものを着ています。高品質のデニムを安定して生産するには、質のいい原糸の確保が重要です。そのため、1991（平成3）年に紡績から整理加工までの一貫生産体制を作り上げました。会社のロゴができたときからデニムの制服を着用しています」

自力で通勤＋できることは何か

本社と広島県内4カ所の工場は山の中にある。横山さんが、「藍染めは、水の質と量が大切」と教えてくれる。

「ですから、街中には工場を作れません。従業員は地元採用が基本で、ほぼ全員が車通勤です。障害のある方が働きたいと希望すれば、作業に支障がなければ雇用していました。記録に残っているのは、1976年入社ですでに定年退職した人がいます。現在、一番勤務歴が長い方は勤続22年ですね」

ただ、障害者の人数は法定雇用率に達していなかった。2007年、当時の社長から「守らないでいい法律はない。なぜ法

「カイハラデニム」で作られた制服姿の本社工場小林洋三染色部主事

令順守ができないのか。すぐ対策を」と指示が出た。

「障害者雇用のマニュアルを作成して、とにかくやってみようと始めました。すぐ近くにある県東部地域障害者就業・生活支援センターとハローワークとも相談して、毎年9月に開かれる集団面接会に参加しました。大原則は、自力で通勤できる方です。通勤に電車やバスを使うのは難しい状況ですし、マイクロバスを出す送迎も難しいので、通える方は限定されます。障害種別は問わず、自力で通える、できる仕事があるという条件に合えば採用しました」

過疎化が進み、工場周辺の人口は少ない。条件を満たしたのは、内部障害、聴覚障害とそれ以外の身体障害の人たちだった。

「本人も作業をしてみないとわからないところがありますから、希望者にはトライアル雇用制度を活用して、現場にはとにかくやってみてと頼みました。当初は定着が難しかったのですが、ここのところ定着してきました」

今日、社員は約600人。そのうち障害のある人たちは9人（聴覚障害4人、視覚障害1人、内部障害1人、それ以外の身体障害2人、知的障害1人）。本社工場と吉舎工場に3人ずつ、上下工場に2人、三和工場に1人おり、雇用率は2％（重度障害者をダブルカウント）になった。9月には初めて、精神障害者のトライアル雇用が三和工場で始まった。

ジョブサポートリーダーが定着を支援

障害者が定着するようになったのは、ジョブサポートリーダーの存在が大きかった。小林洋三さんは、2007年に営業職から本社工場の染色部準備課長に異動となり、障害者を雇用する企業を対象に広島県が実施している「企業内ジョブサポートリーダー」養成研修を受けた。

「職場に聴覚障害の方がいたのですが、当時は孤立し、健常者も気を遣って仕事をしていて、違和感を抱きました。どうしたら垣根がなくなるのか、またどういうふうに接していいのかがわからないので、研修を受けました。手話の本も買って勉強しましたが、私はジェスチャーのほうがよく通じます。そのうちに現場の人たちがジェスチャーでコミュニケーションをとればいいのかと気づき、一気に壁がなくなりました」

仕事の要点は、筆談で確かめている。

「機械が回っていてうるさい職場ですので、健常者は耳栓が必要な工程もあります。その状況下では両者は一緒です。単一的な仕事だけではなく、いろいろな仕事ができるのではないか、障害者が健常者と一緒にいきいきと仕事をするにはどうしたらいいかと考えながらやってきました」

自分が同じ立場だったら寂しいと思った小林さんは、毎日の朝礼や月一度の全体朝礼のとき、筆談で内容を伝えた。

「『働くうえでの一番の弱者に目を向けていますよ、みなさんに平等に仕事をやってもらっていますよ』という管理者の思いがチーム力をアップすると思います。ジョブサポートリーダー研修で東部地域障害者就業・生活支援センターなどとお話をする機会があり、日常的なつながりができて、定着してきたのではないかと思います。私の思いは、杉井が受け継いでくれています」

小林さんが染色部に異動後は、準備課長代行の杉井輝人さんが後を継いだ。

「聴覚障害者の2人の部下がいますが、怪我がないようにと注意しています。10のうち1か2しか伝わっていないときもあり、いまだにコミュニケーションをどうとればいいかは悩んでいます。大事なところは紙に書いて伝えていますが、私より現場の人たちからのほうがよく伝わっているようで、職場の雰囲気はいいと思います」

本社工場杉井輝人準備課長代行

糸の準備作業をする野島祥正さん

本社工場松葉博幸染色部長代行

染色部部長代行の松葉博幸さんも、暖かく見守る。

「小林や杉井がよくやってくれていると思います。今回、社員旅行で2日間生活をともにしました。接してみると、こういうコミュニケーションをしているのかと勉強になり、伝えることの難しさも苦労もわかりました。職場の人たちが日常的にサポートしていることに感謝しています」

心があれば、通じ合える

本社工場には3人の聴覚障害者が働いている。岩川香織さんは入社して3年。高校卒業後、和裁の学校に通い、20年ほど和裁の仕事をしていた。

「和裁の仕事がなくなったので、外で働こうと思いました。普通に会話ができると思われて、いろいろな人が話しかけてこられるのですが、初対面の方とは聞き取りが難しいので、最初は大変でした。ゆっくりはっきり話していただければ、補聴器をかけていますので、意味をとることができます」

食堂の掃除や、時間があるときは工場での作業も行っている。

「工場の仕事でわからないことは書いてもらいます。食堂の掃除はほとんど1人ですので自分のペースで仕事をして、何かあれば事務所に相談します。みなさんによくしていただいていますので、できる限り働き続けたいです」

デニム織物のタペストリーがかかる工場内の休憩室。社員が手づくりしたという長いすに腰かけて、野島祥正さん（39歳）に筆談で話を聞く。

2011年に入社して、糸の準備作業を担当。仕事で困ったことは特になく、休日の楽しみは映画館で映画鑑賞をすること。「糸巻きをかけるのは疲れますが、みんな一緒に仕事ができるのがうれしいです。これからも働き続けたい。機械を操作する仕事をしてみたいです」と書いてくれた。

梶田正一さん（59歳）は、入社して8年。主な仕事は、段ボールや資材の片づけ、糸の台車運び、時間があれば糸巻きをかけるなど。梶田さんと筆談をしながら、班長の佐藤達也さんにも話を伺った。

「数字の『5』と手を出したのが、『待って』

梶田さんと話す佐藤達也班長（左）

ダンボールや資材の片づけ、糸運びと、忙しく働く梶田正一さん

と勘違いをされるなど、たまに食い違いはありますが、自分から仕事を見つけて積極的に仕事をしてくれます。自ら質問してきて、これはこうしたほうがいいと提案もしてくれます」

定年は60歳だが、定年延長で働くことができる。梶田さんが大変だったことはたくさんあったそうだが、うれしかったことは、「いろいろな仕事を任されること」。趣味はマラソン。駅伝部の監督も務める小林さんは、「今日を迎えるまで大変だっただろう」と梶田さんの苦労に思いを寄せる。梶田さんは優秀勤労障害者として、平成25年度の当機構理事長表彰の努力賞を受けた。

仕事もプライベートも充実

近道だという曲がりくねった山道を抜けて小一時間。三和工場の近く、上下工場の傍らを通り過ぎ、三次（みよし）市の丘の上にある吉舎工場に到着した。カイハラの中で一番大きな工場で、紡績から整経（経糸を揃える）・染色・糊付・織布・生機検査（きばた：織布の検査）・整理加工・加工検査／試験、そして出荷と一貫生産を行っている。

リズミカルに動く糸巻機の列、インディゴ液に浸してローラーで絞り、空気に触れることを繰り返し、インディゴブルーに染め上げていくロープ染色機、デニム生地の厚さに合わせて織り上げる最新鋭の織機など、想像していたよりずっと大規模な機械で幅広のデニム生地ができあがっていく。

染色には、川の近くで豊かな水が必須。染色工程がある本社と吉舎工場は排水処理施設を完備し、使用水を川の水よりきれいにして川に流す。環境保全への配慮も徹底している。

吉舎工場の社員は約250人。知的障害者1人が紡績の準備工程で、聴覚障害者と身体障害者1人ずつが最終の加工検査・試験工程で働いている。

藤井忠義さん（20歳）は特別支援学校在学中に職場実習を行い、昨年4月に入社した。

「実習をして、就職したいと思いました。ロープの結び方が難しく、なかなかきつく結べなかったのですが、繰り返していくうちにできるようになりました」

オーストラリアや米国などから輸入される原綿の塊は約200キロ。重量があるので、作業にはコツがいる。上司の紡績課長補佐の吉原秀紀（ひでき）さんたちが指導してきた。

「安全面が重要ですので、現場の先輩も含めて、怪我をしないポイントやコツを指導してきましたが、しっかり一人前になっています」

藤井さんは、原綿の塊を次々にくくり直していく。

「仕事は親切に教えてもらいました。安

三次市にある吉舎工場、最新鋭の紡績、染色、織布の機械が並び、デニム生地が生産されている

吉舎工場沖原真道総務室課長

全には気を付けています。仕事は毎日、楽しいです。これからは、紡績の仕事をこなしていきたいです」

親が送迎したり、最寄りの吉舎駅まで電車に乗り15分歩いて通勤していたが、運転免許をとって、車通勤を始めた。

「学科が一番難しかったです。車は、自分でローンを組んで買いました。運転は楽しいです。広島市内に遊びにも行きました」

仕事もプライベートも充実して、青春まっただなか。趣味は、建築家の父親と一緒に楽しむ日曜大工だ。

「学校で木工を勉強したので、大工になりたかったです。日曜日にはお父さんとトイレや洗面所を改造しました。今後は風呂場を改造します。夢は、結婚です」

小林さんに次いでジョブサポートリーダー研修を受けた、吉舎工場総務室課長の沖原真道（まさみち）さんは、藤井さんの成長に期待を寄せる。

「工場の仕事ですので、怪我に注意していますが、思っていたより早く理解してくれています。しっかり挨拶ができ、よくコミュニケーションもとれるので、職場でもかわいがられ、定着してもらえると信じています。どんどんスキルアップしてほしいと期待しています」

障害者の立場になって考える

最後に小林さんに、ジョブサポートリーダーとして障害者と働くうえで大切なことを聞いた。

「自分がその障害を持っていたらどうかと常に考えること。『耳が聞こえなかったら不安に思うところは何か』をクリアにすることが、私の仕事だと思います。健常者とのギャップで精神的に参っているときには、その人の気持ちになってサポートできるように、しっかりコミュニケーションをとることに気を付けています」

「また、障害者、健常者という区別を一切しないこと。健常者と一緒に働けるところで一緒に働く、が基本スタンスです。いかにその人を生かすか、いかに能力を引き出していくかは障害者も健常者も一緒です。障害者と健常者の共生、ともに仕事をすることで、職場はよくなると思っています」

横山さんは、これからも障害者の採用を続けていきたいという。「地域で働きたい方がいれば、常に声をかけていただくように、就労支援機関などにお願いしています」

巨大な立体倉庫から100mの長さにカットされ、ビニール梱包されたデニム生地が出荷されていく。通勤・人材確保など、過疎地での障害者雇用の難しさを実感しながら、日本のものづくりのすばらしさに心躍った。そして小林さんの、「障害者雇用でも、誇れる存在になりたいですね」。その言葉が心に残った。

各国から輸入された原綿、次の工程に送る準備をする藤井忠義さん

上司の吉原秀紀さん（左）と話す藤井さん